

下天は夢か？ 構造研究室編

[はじめに]

開発土木研究所の月報には、研究室ごとの内外事情を報告する機会(強制的?)が与えられており、今回は構造研究室にその名誉が与えられました。

早速、過去の各研究室の内外事情を読ませていただきましたが、海外に関する報告がほとんどで、これでは海外事情ではないかと思いました。そこで、辞書で「内外」を引きましたところ、「国内と国外」とか「(家の)内と外」との意味と出ておりましたので、それにふさわしい御話を二つ紹介いたします。

構造研究室では、毎年度の研究成果をいろいろな機会をとらえて発表しておりますが、今度の室長になってからは、中央に攻め込み全国レベルで勝負するとして、ローカル誌での発表はダメとなり、研究員の気持ちとはまったくかけ離れた東京を中心とする全国規模の研究会での発表が多くなりました。(ちなみに、構造研究室員の間ではパソコンゲームの「信長の野望」などの戦闘ものに人気がある)。

そんなわけで、今回の報告もその方針の犠牲となった2件の涙々の物語です。

最初、土木学会に設けられた衝撃問題研究小委員会が主催したシンポジウムに関する報告で、純粋な国内での出来事であり、もうひとつは、建設省土木研究所で開催された第7回日米橋梁ワークショップに関する報告で、国内で体験した国外の出来事があります。正に字のと通りの内外事情を自信をもって構造研究室よりお送りしますので、これを読まれたあなたも来年度これと似た出来事に構造研究室でチャレンジしてみませんか？。

[出来事 その1]

落石等による衝撃問題に関するシンポジウムに参加して

私こと今野久志は、平成3年3月22~23日に東京都の土木学会図書館を会場として開催された「落石等による衝撃問題に関するシンポジウム」に参加してまいりました。このシンポジウムは、土木学会構

造工学委員会の中に、1989年10月に設けられた衝撃問題研究小委員会の活動の一環として開催されたものであります。

シンポジウムには、全国から衝撃問題を研究する一線級の研究者が参加しており、今回は2日間をわたって火花を散らしあつた激しい戦いの状況について報告したいと思います。

シンポジウムでは、学術研究と実務に関する調査研究の30編の発表と日本大学の能町先生、熊本工業大学の竹田先生の特別講演がありました。

会場には、150ほどの席が用意されていましたが、これを上まわる参加者が予想されていたため(最終的な参加者は266人でした)、ほかに1室用意されており、そこでは発表者の講演がモニターで見るようになっていました。

発表は4名から5名のセッションに別れ、質問はまとめて行うというやり方でした。質問は各発表にまんべんなくが理想ですが、特に質問攻めにあっていたのがA大学です。A大学からは3編の発表があり、このうち2編は学生の発表でした。

学生は初めての?発表だったらしく、関西弁のM先生の質問におどおどするばかりです。すかさず助け船をだそうと手を上げ説明するA大学の先生ですが、スッポンのようにつこい攻撃に、あえなく撃沈され、最後はしどろもどろな返答になってしまいました。

私は「EPSを用いた落石覆道の緩衝材構造について」と題して、初日の午後から発表がありました。全国レベルでの発表は3回目であり、厳しい質問に苦しめられたこともあったので、準備は入念に行つたつもりです。今回の発表は実験結果の報告が主であり、衝撃問題では特に問題となる計測方法については理想的なシステムで行っているの、特にむずかしい質問もなく無事に終わりましたが、解析などを含めた発表のときには、火だるまにされないように気を付けようと思います。

2日目は自分の発表も終わり、攻め込まれること

はないので攻撃に専念しました。指揮官のN室長と別室のモニター前に陣取り、コーヒーを飲みながら十分に作戦を練り、質問の時間に発表室に出陣するといったスタイルです。

われわれは、特に計測方法についての質問をしましたが、A大学との最後の攻防で、「計測センサーの設置位置をどのように決めたのか」というN室長の質問に、「過去の経験から……」という答えが返ってきたときには、さすがにこちらにも戦意を喪失し、それ以上の攻撃はできませんでした。

このほかにも熱い(寒い?)戦いが随所で見られましたが、今回戦いに敗れた人は、次回はさらに戦力をアップして戦いに望まなければならず、このような勝負が全体の研究のレベルアップにつながるものと感じました。今回発表した緩衝材関係の研究は今年度も継続中であり、また次の戦いに向けて着々と準備を進めているところであります。

【出来事 その2】

第7回日米橋梁ワークショップに参加して

さて、私こと谷口秀之は、平成3年5月8～9日に建設省土木研究所において開催された日米橋梁ワークショップ(以後、ワークショップと呼ぶ)に参加してまいりました。このワークショップは、「天然資源の開発利用に関する日米会議(UJNR)」の中の耐風耐震構造専門部会の活動の一環となっています。なお、この会議は、アメリカからの出席者もいるため、発表はすべて英語でありました。私は発表があったので、それは仕方ないとしてもそれ以外のところでは、ヒアリングに徹しようとして心の中では決めていました。しかし、そうは問屋が卸しません。初日の最

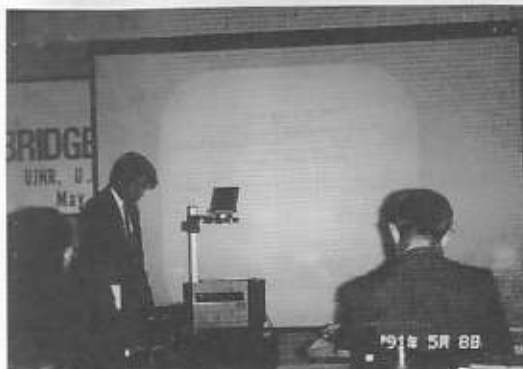


Photo-1 Mr. Taniguchi under fighting unsupported

初のコーヒーブレイクの時間に、いきなり攻め込まれてしまったのです。

ソファに腰掛けて、ぼーっとコーヒーを飲んでいると、頭上から、「Hokkaido Development Bureau?」と英語らしき言葉が聞こえてきました。恐る恐る見上げると、そこには日本人ばなれした顔が。そうです、なんの前ぶれもなく、いきなりアメリカの方に話しかけられてしまったのでした。ピンチ!

あまりにも突然の出来事で「えっ」と応えるしかできず、その後の質問にも「Yes, Yes」と応えるのが精一杯でした。また、その後のコーヒーブレイクでは2度とソファに座ることはありませんでした。

教訓その1

国際会議にでるときは、いつ話しかけられてもいように、たとえコーヒーブレイクの時間であっても緊張を解いてはいけない。

また、私自身の発表は「On the behavior of Base-isolated Bearings at Low Temperatures」というタイトルで免震支承の実験結果についての報告でしたが、15分の発表時間のところを25分ぐらいかけてしまったので、一番心配だった質問の時間がなくなってしまいました。ほっと胸を撫でおろしていましたが相手はさすがにアメリカ人、ただでは帰してはくれません。この後、私は2つの難問を抱えることになったのです。

ワークショップ初日の夜にレセプションが開かれたのですが、楽しいはずのその場でひとつ目の問題が突然私に降りかかってきました。

実は、私の発表に対していろいろ聞きたいことがあるというアメリカの方がいたのです。酒も少々入っていたせいか、英会話研修の成果を発揮できるチャンスと思い、気合いを入れてその人のところへ向かい話しかけました。

「Excuse me」と震える声で。そうしてなんとかきっかけをつかんで、あれこれ話を聞いていたのですが、あまり長く話し続けるのでわけがわからなくなり、頭の中がパニック状態に陥りそうになりました。

そこでフッとあたりを見まわすと、なんと私達の会話を聞いてうんうんとうなずいている人がいるで

はありませんか。チャンス!! 地獄に仏とはまさにこのこと。この後、3人によるトライアングル英会話となったのは言うまでもありません。こうして、無事その場をしのいだのでした。

教訓その2

国際会議のレセプションなどは、外国の人と話せるめったにないチャンスなのでアルコールの勢いにまかせて積極的に話すべし。ただし、英語のあまり得意でない人は、近くに英語のできそうな人がいることを必ず確認しておくこと。

さて、ワークショップも2日目に入り、出席者の中にもスケジュールの都合で帰られる人の姿がちらほら見られるようになりました。そこで、ふと気づくと私のまわりにはいつのまにか誰もいなくなっていました。ここで見計らったように、第2の問題が降りかかってきたのです。

3列ほど前方に座っていたアメリカ人が突然歩み寄ってきて「Are you Taniguchi?」といいながら私のとなりの席についたのです。これはまずいと思い、まわりを見まわしたところでもう誰もいません。覚悟を決めて、自分1人の力で会話する決心をしました。会話の詳しい内容は省きますが(決して内容を

を理解できなかったわけではない)、いくつかのアドバイスを受けて、うんうんうなづいていたところ会話がぶつ切り途絶えました。少し間をおいて、相手は私の顔をのぞき込んでいました。「DO you understand?」

実は、最後の話が質問だったらしく、相手はその答えを期待していたのでした。そのあと簡単な英語で再び質問してくれましたが、なんのことはないごく簡単な質問だったので軽く答えてあげました。

教訓その3

国際会議においては、できるだけ一人きりにならないように気をつけること。やむをえず、マンツーマンで話をしなければならないときは、いつ質問されてもいように疑問文に最大の注意を払うこと。

こうして2日間にわたる英語漬けのワークショップも終わり、私のような英語の得意ではない者でもなんとか無事に帰って来ることができました(いろいろ問題はありましたが)。国際会議は、日本人ばかりの会議に比べて貴重な体験をいろいろできるので、皆さんも恐れずにどんどん参加してみたいかがですか。

(記 山内敏夫、今野久志、谷口秀之)

*

*

*